いろいろなことを教えてくれる子どもたち(8)

村石京子

この稿を書くに当って、もっと五月号らしい話題を見つけた方がよいのではないだろうかと随分迷いました。けれど結局、今の私の心に強く残っているものの方を記したいという気持があるので、今月も、今現在の子どもの様子や出来事の中から書いていくことにしました。そんなわけですので、季節感のずれ、五月号にお正月の話題などとなってしまうことはお許しいただきたいと思います。

○お友だちがお休み

三学期になると、家庭でも園でも気をつけていても、やはり風邪の流行るときがあります。一月のある日の朝は、欠席の電話が次々と入って、私のクラスでも五人程欠席という日がありました。

今日はお休みの人が多くてちょっと淋しいなと思いましたが、それでも時間になると子どもたちは次々と登園します。朝の挨拶を交したり、母親から言伝てを受けたりしている間に、思い思いに今日の活動が開始されました。もう四才児クラスの三学期ですから、私からの働きかけがなくても、友だち同士でいろいろな遊びをはじめ

ていきます。

あわたゞしい朝の一時が過ぎて、ふと気がつくとポツンと一人、今にも泣きそうな表情の子どもがいます。「あら、K子ちゃん、どうしたの？」と問うと、それまでこらえていた悲しさがせきを切ったように、大粒の涙がポタポタと落ちてきました。この子は三年保育から入園した子どもで、園に慣れるまでは初めは母親から離れられずに泣いたり、自分の要求がはっきり言えない引込思案なところが多く見られましたが、最近はとても明るく元気な様子に変ってきていたのです。近頃は、新しい活動にもよく進んで参加しますし、友だち関係も問題がなくて友だち遊びが順調に続けられているので、その成長を思って私はとても喜んでいたのです。殊に最近の友だちへのかかわり方や、その中でのよく笑う楽しげな様子、そして自分で遊びをつくりだしていく創造的な様子などからは、以前のK子の姿を思い出すことはあまりなく、安心していました。

ところが今日の、日頃とはうって変った心細げな表情、朝から何も手がつかないといったことはどうしたわけなのでしょう。「どうしたの？」と少し気持が落ちついた頃にまた問いかけると、今度は蚊のなくような声で、「M子ちゃんがいないの」と言います。私はアッと思ったのです。

K子の日頃の明るい様子は、M子との結びつきを基本としてつくられているものであり、その安定したものの上で、他の友だちへのかかわりも出来ていたものだということを理解したのです。これはしかし、M子との関係においては、K子がM子に依存していたものではないと、いつも二人の相柄を見る限りは考えられます。フォロアとリーダーというようなものではなく、お互い気心の知れあった仲よしでした。けれど二人で複合されたものによるプラスの作用から、他の友だちへの働きかけもつくられているものであったとすれば、K子が一人になってしまった今日は、また以前のように心細く、不安定なK子にもどってしまったのです。

外側から見て大丈夫と思っていても、まだ内面的には

変っていない部分があるのだということを、私自身も気づく折でした。でもいつも、M子と一緒に行動出来るとは限りません。K子は今日、それを乗りこえていく機会としてもらいたいと考えました。

もし今日が入園当初なら、K子が困っていれば私は手をさしのべていきます。そして友だちのつなぎをつくっていけるように、働きかけます。けれど今はもうすでに一年間と二学期間という月日が経過しているのですから、ここですぐに私が手を出してしまうのはどうなのだろうかと考えました。むしろ、K子が自分の力で他の子どもと遊ぶきっかけとなってほしいと思いました。それで「今日はM子ちゃんは風邪でお休みなの」とだけ言って、次のK子の行動を促す働きかけは何もしませんでした。

暫くは途方にくれたようなK子でした。そして「Kちゃんどうしたの?」とか「一緒に遊ぼう。」という声がかかっても、K子は年小級のときのように、いや、いやをしています。私は待つことに心を決めました。もうそのことは事件とならないようにさりげなく見て、その間にも「これ、やって。」などと言ってくる他の子の要求に応えていく態勢をとったのです。そしてその間に、K子の様子の変化を待ってみました。

K子は一とき落ちつかぬ心細げな表情でいましたが、やがて気持がおさまったのか周りを見たりしています。もう大丈夫かなと思っていたとき、全くタイミングよく、ままごとのコーナーからS子の声がかかりました。「Kちゃん遊ぼうよ」K子はその声を待っていたかのように、ままごとの家に行って「入れて」と言いました。これは、S子の呼びかけがきっかけになったとはいえ、K子自身の気持から出た言葉だったのです。そしてままごとコーナーでは、K子も含めて四人の女児たちの役割とりきめがあったり、誕生日ごっこの遊びなどが進められていきました。口々にいろいろ言っている中に、K子の声もポツポツと聞こえてきます。私は安心すると同時に、「誰ちゃん遊んであげてね」とか、「Kちゃんこれこれして遊びましょうよ」などと子どもの行動に対して

はやまった誘導や押しつけをしないでよかったなと思いました。何故といって、大人ではなくて、友だちが助けてくれたという動機のもとに、状況を変えていく努力をK子も行なったということは、二つの大きな意味をもっているのですから。

私は安堵して、別のグループの製作などに打ちこむ気持になりました。そして暫くしたとき、S子が走って来て弾んだ声で言いました。「先生、先生、Kちゃんが笑ったのよ。さっきまで泣いてたけど、今日幼稚園に来てはじめて笑ったのよ」と自分もニコニコしながら言うのです。友だちだって夫々のところで遊んでいながらも、K子のことを気にしていたのでしょう。この言葉は、四才の後半になると、もう自分のことだけでなく、随分と友だちを思いやる心が育っているのだと教えてくれ、とても嬉しかったものです。そしてそれだけ、友だち関係が深くなってきているのだということを知りました。

帰りしなに、私はK子にそっと聞いてみました。「ねえKちゃん、今日楽しかった？」「うん」とニッコリしながら、K子はうなずきました。次の日もM子は欠席でしたが、もう何事もなくK子はS子たちと遊んでいました。更に翌日、M子が登園し、K子とM子の関係、そして他の子どもたちへのかかわり方は、一見元の状態にもどったように見えましたけれど、これは決して元にもどってしまったのではなく、K子の心の中には一歩前進したものがつくられているのだと私は考えているのです。

○お正月の挨拶

話は前の項よりさかのぼって、三学期の始まりの日のことです。始業式には、年も改まって初顔合わせの日のこと故、親も子も気分を新たにして、いつもより丁寧な朝の挨拶がとりかわされます。「明けましておめでとうございます」と改まった口調で言う子どももあれば、今日から幼稚園がはじまったという喜びを顔中に表わしながら、「先生、お早ようございます」と張りきった声で言う子どももあります。私は「おめでとう」と言う子どもにはおめでとうと返し、「お早よう」と言う子どもに

は「お早よう」と言葉を返しておりました。

そしてクラスの子どもたちが揃ったので、今度は遊戯室において三学期の始業式です。「それじゃ、これから園長先生と一緒に新年おめでとうございますをして、今日から幼稚園がはじまるので、そのお話をうかがいましょうね」と言って並んで出かけようとしました。そのとき「先生」という呼びかけ。声はJ夫でした。何か用事かと思い「なあに？」と問うと、とても真剣な顔で「あのね、僕の家ではおじいさんが亡くなったので、おめでとうございますが出来ないのだけど、何と言えば良いの？」と聞くのです。実は私も今年は喪中のため、こちらからの年賀はいたしませんでしたが、子どもへの応答は普通にしておりました。むしろ人前ではそのことを現わさないようにと努めておりました。けれどもJ夫の言葉で、急に胸がジンとしてしまったのです。

きっとこの子の家庭では、きちんと理由を話して、今年のお正月のあり方を子どもにも理解させてあったのでしょう。家庭で教えられたこと、けじめを守ろうという真面目さが伝わってきました。「それじゃ、Jちゃんは今日はだまって御挨拶すればよいわね」と言ったのですが、そっと見ていると全員でおめでとうをかわしたとき、J夫は本当にだまって頭を下げておりました。その様子に私はまた胸を打たれたものでした。

○いろはかるた

今度は面白い話題を一つ。お正月過ぎはクラスでも、羽根つきや凧上げ、かるたとりなどが盛んです。童話かるたなどを何回かくり返しやっていたある日のこと、Y子が自分の家から「犬棒かるた」というのを持ってきて「これをやりたい」と言います。

見せてもらうと私が子どもの頃あった「いろはかるた」のことで、言葉が昔ながらのものであるのは勿論のこと、絵も何やらクラシック調です。あら、またこんなものが出ているのかとなつかしかったり、驚いたりしたものです。「家にもそれがある」と言う子どもが他にも何人かいて、早速「犬棒かるた」とりとなりました。家

にあると言った子どもの中から、一人読み手が立候補してきました。読んでもらうと、成る程自分で名のりでただけに中々の読み上手です。「いぬもあるけばぼうにあたる」「ろんよりしょうこ」「はなよりだんご」すらすらと読んでいます。「よしのずいからてんじょうをのぞく」「えてにほあげ」あれ、あれ、何のことだかわからないだろうな？でも参加した子どもたちは結構楽しそうに、「ハイッ」「ハイッ」とかるたをとっています。わけがわからなくても百人一首と同じで、小さい頃から親しんでいれば何となく覚え、好きになっていくものだからむずかしいことを言わなくても、好きにやっていればよいのかなどと私は迷ってしまうのです。

そして突然、読み手のU子は言いました。「しらぬがほっとけ」「え？！」と私。U子はすましてもう一度、「しらぬがほっとけ」思わず笑ってしまう私のまわりで、「笑っていないでやりなさい」と子どもたち。

いろはかるたのことわざも、今様にだんだん変っていくのでしょうか。勿論この子はただ読みちがえただけのことかもしれません。でも「知らぬがほっとけ」ならば、正に現代の風調にぴったりとも言えましょう。でも、でもやはり、次の時代をになう子どもたちには、知らぬがほっとけにはなってほしくはありませんね。そしてそのためにも、幼児教育にかかわる人間としては、知らぬがほっとけではすまされないことが多くあるのです。かるたとりをしながら、おかしかったり、考えさせられたりした日でした。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）